

# 茗 溪



## 特集

- I 世界との共生を
- II 筑波大学附属学校の現状と課題

グラビア	01
特集 I 世界との共生を	02～05
特集 II 筑波大学附属学校の現状と課題	06～09
第14回茗溪・筑波	
グラントフェスティバル開催	10～11
茗溪会／公開講座から	12～14
平成22年度 茗溪会公益事業計画(案)	15
第9回「顕彰」候補者の推薦依頼について	15
平成21年度筑波大学芸術賞、茗溪会賞決まる	16
さよならE館・G館	17
第25回 教職受験対策研修会から	17
茗溪学園だより	18
桐の葉のつどい	19
季刊誌「茗溪」などを確実にお届けしたい	20
追悼録	21
通常総会開催のご案内	21
本部だより	22
編集後記	22

meikei

# 春

# 2010

No.1065



# さよならE館・G館 思い出の集い



左奥に懐かしのE館が見える  
関連17ページ参照

## 人間を樹木に置き換えて

下図は、人間を樹木に置き換えて、樹木の根の張り方、幹の太さ、葉の色、葉の繁り方、そして太陽のあたり方など多角的に見ていくための「健康評価シート」です。一人ひとりの人間を総合的に見ながら、年齢、性差、生活環境（栄養、運動）などを聴きながら、これからの生活の仕方についてカウンセリングを行っています。



(古藤昭子さんの公開講座から) 関連14ページ参照

## 第14回 茗溪・筑波グランドフェスティバル

関連10~11ページ参照



本年度のテーマ文字は「楽」です。このフェスティバルを核に茗溪会と筑波大学および関連する方々の絆を密にし、共に楽しむための同窓組織として発展させていきます。(新井委員長の言葉から)

	あなただけの健康評価シート				
	レベル-1(低)	レベル-2	レベル-3(中)	レベル-4	レベル-5(高)
内臓年齢	【枯葉色】	【うすい緑色】	【普通の緑色】	【やや濃い緑色】	【濃い緑色】
栄養	【少ない葉】	【やや少ない葉】	【普通の葉】	【やや多く茂った葉】	【非常に多く茂った葉】
体力	【細い幹】	【やや細い幹】	【普通の幹】	【太い幹】	【非常に太い幹】
身体エネルギー	【張りの弱い根】	【やや張りの弱い根】	【普通の根】	【しっかり張っている根】	【非常にしっかり張っている根】
精神エネルギー	【曇り】	【晴れ時々曇り】	【晴れ】	【快晴】	【すばらしい快晴】
生活エネルギー	【不作】	【やや不作】	【普通】	【やや豊作】	【豊作】



# 世界との共生を

現在、わが国をはじめ世界的な規模で、経済、環境、文化、教育（人材育成）等の分野をはじめ、多方面にわたっての“国際化”“国際交流”が進められている。

今回は、筑波大学の取り組みを通して、世界との共生について考察する。

## 国際化 教育システムの



ハーバード大学を訪問した時の清水氏

国立大学法人筑波大学理事・副学長：教育担当

清水 一彦

### 「開かれた大学」の真の実現をめざす

筑波大学は、幅広い学問分野を有しており、学際融合的な教育研究を強みとする総合大学として、先端的・独創的な知の創出と個性輝く人材の育成を通じて世界に貢献することを目標に、国際的に活躍できる人材を養成することが求められています。「開かれた大学」は本大学の創設の理念の一つであり、国際交流の活性化や教育研究の国際化は今日まで一貫して叫ばれ続けてきました。

第二期中期目標では、こうした歴史や伝統を背景に、その前文で「アジアをはじめ世界の国々や地域に開かれた大学として、国際的通用性のある教育研究活動の展開と連携交流に積極的に取り組み、国際的な信頼性と発信力を有する大学を実現する。」ことを大学の基本的な目標と掲げています。また、山田信博学長も、新年の年頭所感の中で、「開かれた大学として全力をあげて、新時代に向けて、率先して大学の使命や価値を社会に向けて発信していきたい」と強い決意を表しております。

本学では、すでに国際交流協定数は51カ国189機関（大学院41、部局間148）に及び、留学生数も、短期留学生や研究生等を含めて1522人（学群266人、大学院1256人）に達しています（平成21年5月）。これは10年前（93人）の1.6倍、20年前（64人）の2.3倍に当たります。この中には、平成7年の人文社会科学研究所国際公共政策専攻／経済学専攻（世銀プログラム、隔年受入）経済・公共政策マネジメントプログラム（22人）を皮切りに、英語の授業による大学院学位プログラムも含まれており、これまで11の大学院学位コースが各研究科で実施されてきました。

昨年採択された「グローバル30」を契機に、こうした動きはさらに加速し、新たに学群レベルにおいて、社会国際学、生命環境学、及び国際医療科学の3つの分野で英語授業による学士課程レベルの学位プログラムが開始されようとしております。大学院においても、新たに6つの学位プログラムが予定されています。

このグローバル30では、10年後には、留学生総数を4500人に増やす計画であり、現在の全学生数の8.1%を10年後には24.9%に引き上げ、とくに大学院博士課程では2人に1人、修士課程では4人に1人が留学生といった時代の到来を目指しております。

国際交流の場として、本学が企画・実践しているCosmos Café InternationalやCity Chat Caféも学内をはじめ広く地域社会に広まりつつあります。

前者は、英語だけでなく日本語やどの国の言葉も使用しながら毎週所定の場所・時間において行われている学生と留学生との交流の場であり、後者は、つくば市内の商業地を会場に、主に土・日曜日に市内に住む外国人研究者や留学生が気軽に交流する場です。ともに本学学生がコミュニケーションをサポートしていますが、こうした取り組みは本学が目指す「国際性の日常化」を支援・実践する場としてますます重要なものとなっております。

### 教育システムの国際化を図る

ところで、現在、文部科学省中央教育審議会でも議論になっているように、今後の大学においては国際的通用性の保持のため、高等教育や学位の質の保証が重要な課題となっております。本学でも、「高度で先進的な研究に裏打ちされた学士課程から博士課程までの教育を通じて学生の個性と能力を開花させ、豊かな人間性と創造的な知力を蓄え、自立して国際的に活躍できる人材を育成する」（第二期中期目標）ことを目標に、「本学の教育の伝統に根ざす学士力、修士力、博士力をさらに強化するために、学生の視点に立ち、教育の質保証ができるような方策が必要」（学長年頭所感）となっております。

すでに平成19年度の学群・学類改組に伴って、学士課程の教育宣言としての「筑波スタンダード」を策定・公表しており、現在さらに教養教育スタンダードとともに大学院版の筑波スタンダードの作成に取り組んでいるところです。わが国大学の初となる学士力、修士力及び博士力の明示とともに、その見える変化は本学の担う先導

的役割と考えております。

他方、教育・研究活動の改善と充実に向けて、新たに革新的な未来型教育プログラム等を開発するなど、不断に努力することも重要な課題となってきました。

すでに本学では、大学院生が国内外の医学研究の現場を体験（「武者修行」）させる「世界基準を体感する武者修行応援プログラム」や海外でのフィールド調査を組み込んだ「個性とキャリアを繋ぐ医科学教育ルネサンス」（医学系大学院イニシアティブ）、人社会系分野融合型教育をめざし、世界各地でのフィールドワーク、国際インターンシップ、国際学会発表などを経験させる「インターファカルティ教育研究イニシアティブ（IFER-I）」のほか、留学生に対する日本語能力に応じた伝統的な日本語教育も継続実施しております。

とくに早くから日本語教育実習を行っていた日本語・日本文化学類では、平成13年度から正規の授業として組み入れ、3年前からインターンシップ授業を開始、毎年10名程度が海外で大学生に日本語を教えています。

こうした状況を踏まえ、現在、世界的（最高）な水準の教育研究を行うとともに、未来型の教育研究を開拓し、新たな人材養成プログラムの開発による国際的に活躍できる人材の育成を推進するため、平成22年度以降に「教育イニシアティブ機構」（仮称）を設置することになっています。この教育イニシアティブ機構は、優れた教育研究を基盤として、新たに革新的な未来型教育プログラム及び学位を中心とする新たな教育プログラム等の開発に関する企画立案及びその実施に関する運営支援を行い、プログラムの審査・評価を含んだ未来型の教育研究開拓のマネジメントを行うこととしております。学長を機構長とし、教育担当副学長を副機構長として、教育企画室が中心となってその事業を推進するものです。

このように、国際化教育システムの指標ともなる学位力の明示と学位の質保証をはじめ、デュアルディグリー単位互換制、秋季入学、さらにはサマースクールといった制度についても更なる促進に向けた努力が続けられているところとす。



チュニジアの留学説明会  
学生であふれる受付



モロッコ王国 留学説明会にて

国立大学法人筑波大学理事・  
副学長：国際担当

塩尻 和子

## 筑波大学での 国際交流

### 国際交流の基本姿勢

急速にグローバル化が進む今日の世界情勢のなかでは、他の国や地域と共同で対処しなければならぬ難問が続出してあります。これに対して、政治的な関係改善や経済的効率の影響といった具体的な側面だけでなく、世界の研究型大学には地球規模課題に対する学術的な解決策の提示がもたらわれています。

今日、混迷した世界の人人々に未来を切り開く希望を与える知の創造と、地球人・国際人としての将来を担う若い人材の育成を主たる目的とする先端的大学の使命は、ますます大きくなってまいります。いまや、大学は、地球規模の課題に対処できる優れた人材を育成することができるといえるか、大学そのものの活動がいかに国際社会に貢献することができるといえるか、という点が問われる時代になったのです。このようなグローバル時代においては、大学はかつての「象牙の塔」のままにアカデミズムのみを追究し続けることはできません。大学は研究機関として先端的な学術的研鑽を積むと同時に、現実社会との関わりをなすなかで、今の時代の要求に適合する社会貢献を目指していくことが求められているのです。

今日の理想的な研究型大学が、学術的であると同時に社会的にも世界に貢献できる大学であるとすれば、それはまさに、筑波大学の建学の理念に合致することでもあります。

本学は、新構想大学として開学以来の「開かれた大学」という理念のうえに、国内外の大学を取り巻く環境を正しく認識し、経営の効率化も念頭に置きながら、本学の特性を活かした国際戦略方針を策定してきました。

これは、今から100年以上も前に、本学の前身である東京高等師範学校の校長であった嘉納治五郎先生が、その在任中に中国から7000人余の留学生を受け入れて優秀な人材を育成し、日中交流に努められたことから始まっております。

この伝統のうえに、本学では当初から「知の世界拠点として世界と共生する大学」を目指し、環境保護、感染



症、国際紛争など緊急の地球規模課題の解決に貢献する人材の育成と、国際的に活躍できるリーダーの育成を主眼として、留学生だけでなく日本人学生の国際化に効果的な「英語で学び英語で自己表現をする」教育を目指してきました。

## 国際化の拠点校のつくり

建学の理念である「開かれた大学」の意味するところは、「国際性の日常化」すなわち「世界との共生」の実現を目指すということでもあります。それは、学内に日本人と外国人が、学生も教員も、共に学び合い助け合っただけでなく、切磋琢磨する光景が当たり前のこととして受けとめられる環境を作り上げることです。それはまた、学内の「世界的研究・教育の拠点」機能を強化し、国際的に効果的かつ戦略的な実績を上げることにも繋がって行くのです。

本学では、以下に述べるように、文科省の「国際化拠点整備事業」(グローバル30)の拠点校のひとつに採択されたことを契機として、全学的な国際化事業を効果的に進め、同時に、筑波研究学園都市という地の利を生かして地域との連携を図り、本学のイニシアティブによって地域社会にもふさわしい国際化を推進するために、学長を委員長とする「国際化推進委員会」を昨年7月16日に発足させました。

この委員会の下位組織として各副学長・理事が取りまとめる「海外拠点運営小委員会」「全学英語プログラム小委員会」「外国人教員等雇用小委員会」などを立上げ、国際化の個々の問題について討議を重ねており、このシステムは発足以降、着実に運営されており、グローバル30をふくめた全学的な国際化事業を牽引する役割を果たしております。

本学では、平成21年12月1日現在、103カ国から約1740名の留学生を受入れています。全学生数に占める留学生比率は約8.1%で、国立大学の中では東大に次いで2番目に多くなっています。特に留学生のうち、研究生等

を含む大学院生は81・5%であり、大学院大学として国際的に高度な人材養成に貢献していることが実数でも証明されています。平成22年度末には留学生数は20000人を超えることが予想されます。今後も意欲的で優れた留学生を確保することと同時に、勉強だけでなく、生活や卒業後の進路についても、ますます適切で丁寧な対応が求められます。

日本から海外へ出かける日本人留学生の事情には、近年の我が国の若者の「内向き」傾向が如実に反映されており、この問題に対処するために、本学では大学間交流協定校を中心に本学生の留学を推進しており、平成20年度では21名の学生を協定校に派遣しました。

若い時に外国を体験することは「百聞は一見にしかず」という以上の効果があります。「遊学」や「旅行」でさえも有益な経験となりますが、とくに短期間であつても海外の大学に留学して、諸外国の同年代の若者たちと交流し、日本においては味わうことができない経験を積むことは、わが国の将来だけでなく、21世紀の国際関係においても重要なことでもあります。

派遣留学生の数をさらに増やすためには、多言語教育を拡充したり本学独自の奨学金制度を設けたりして、海外留学を支援する体制を強化することも必要です。同時に、派遣学生にも、また留学生にも有益な、留学先との単位互換制度や本格的なダブルディグリー制度を、一日も早く確立することあります。

## 国際化拠点整備事業(グローバル30)

前述のように、本学は平成21年7月3日に、文部科学省の国際化拠点整備事業(グローバル30)の拠点校の一つとして採択されました。この事業は平成21年度から25年度までの5年間、実施される予定です。本事業の要点は以下の3点にまとめられます。

### 英語による授業等の実施体制の構築

英語による授業のみで学位が取得できるコースを整備

するために、本学では、本事業の実施期間中に、まず学部レベルで3コース、大学院レベルで少なくとも7コースを、本年度から、新たに開設してまいります。

本学では、英語科目は学群で148科目、大学院で272科目がすでに開設されており、大学院における既存の英語学位プログラムは11のほりです。

これらのコースで指導に当たる外国人教員をあらたに24名、採用することを決定し、現在、人選が進んでいます。その多くが、国籍はさまざまですが世界的に優れた若手の研究者であり、本学での今後の活躍が期待される場所です。

### 留学生受入れに関する体制の整備

本学は、平成20年度実績で、51カ国、192の大学・研究所・国際機関との交流協定を締結しており、留学生の受け入れにはこれらの協定校を中心として進めております。また、本学の海外拠点や海外事務所を活用して、アフリカ、中央アジア・アジア・ヨーロッパの諸地域からの受け入れを重点的に実施しています。

留学生の日本での生活に対すおまな支援は、宿舍の整備・改修、カウンセリング体制の拡充、学内文書の多言語化の促進、諸手続きの支援の強化などですが、本年度へむけて、経済的支援の確保、日本語・日本文化の学習機会のある充実、留学生に対するキャリア支援制度の拡充などにも、重点的に取り組む準備を整えております。

### 戦略的な国際連携の推進

本学には海外拠点として、すでにチュニスに北アフリカ・地中海事務所、タシケントに中央アジア事務所を設置していますが、去年度、あらたにホーチミン・シテイ、北京、ドイツのボンにも海外事務所を設置しました。これらの海外事務所では、大学説明会や留学希望者に対する支援を行なうだけでなく、現地の研究機関と連携して先端的共同研究を展開するなどの学術交流を進める予定です。

## 本学の新しい海外拠点

# 山田学長らが北京で交流

### 当地の茗溪会員 大集合!!

筑波大学中国交友会設立大会及び筑波大学北京事務所開所式が昨年12月13日、中国・北京市において開催された。式典には本学から山田信博学長をはじめ関係者が参加し、他に中国交友会会員、事務所のある日本学術振興会北京研究連絡センター、北京茗溪会などから約160人が参加した。(中略)式典の前日には「北京茗溪の集い」が開催され、山田学長や塩尻和子副学長(国際担当)らが出席し、中国北京市などに駐在している本学卒業生で構成される茗溪会の会員と交流を深めた。～筑波大学新聞 平成22・2・1号から～



留学説明会。500人の学生が押しかけた

今回、本学の国際化拠点整備事業において、文科省から海外大学共同利用事務所として認定された北アフリカ・地中海事務所は、日本の大学として唯一の北アフリカ地域における学術拠点として、すでに多くの実績を積み上げて来ました。その事業の一部として、このたび、他大学にも門戸を開いた共同利用事務所を立ち上げ、11月12日に学長にもご参加いただき開所式を挙行了しました。2月、3月にはチュニジア、アルジェリア、モロッコ、モリタニアでの留学案内と大学説明会とを開催しております。2月3日に開催されたチュニスでの説明会では500人以上の学生が詰めかけ、日本留学についての関心の高さが再認識されました。平成22年5月中旬には、この共同利用事務所を中心にして、日本・北アフリカ学長会議を開催する予定で、その準備に追われている昨今です。

### 国際化への期待

本学は、さいわいにも文科省による平成21年度の公募案件「国際化拠点整備事業」13拠点校のなかに加えていただきましたが、このことは、大学の「国際化」とはなにを意味するのか、なにを目標とするべきなのか、あらためて考えてみるよい機会となったと思われまます。

近年各大学では、外国人教員による授業が、語学専門教育の科目でなくても、外国語で行われることが増えてきました。これを入学から卒業までの学位取得が可能なコースとして実施することが求められるようになりま

した。このたびの「国際化拠点整備事業」においては、特に英語による授業のみで学位取得が可能なコースを、新たに設置することが応募条件のひとつとなっています。しかし重要なことは、何をどのように表現するのかという表現の「中身」の問題であります。英語コースを受講した者が「英語の発音がきれいだ、あるいは日常会話が巧みである」というだけでは、高等教育を受けたとは言えないでしょう。むしろ、発音が下手でも、流暢な挨拶が

できなくても、訥々とした語り口の中に学業への真摯な姿勢と大学教育による知の蓄積が表現されているなら、それこそが「英語で自己表現をする」ことになるのです。冒頭部分で述べたことでもありますが、大学が、世界の人々と協働でき、グローバル化した社会において人類の進歩と平和に貢献できる人材育成を主眼とする教育・研究の世界的拠点となるのが、21世紀の「国際化」や「国際交流」の指標となるのです。しかし、そのためには、学生だけでなく教職員全体の意識改革が必要です。外国の先端校で教育をうけ学位を取得した教員でさえも、英語や外国語で授業を行ったり、留学生の指導教員となったりすることを好まないという報告もあります。大学の国際化が成功するための鍵は、この意識改革にあるのかもしれない。大学が、外国語で自己表現ができる積極的な学生を育て、同時に諸外国や外国人に対して開かれることが「知の世界拠点として世界と共生する大学」への第一歩でありましょう。

日本の大学が「世界との共生」の場となり、学内で外国人も日本人もともに協力して研鑽しあう姿が当たり前の光景となること、すなわち「国際性の日常化」を目指すことが新たな国際化への道筋であり、日本の大学の国際貢献への道でもあるのです。

### 温かい雰囲気での国際交流を

繰り返しになりますが、本学では「世界との共生の場」というコンセプトをもとに、大学内に「国際性の日常化」を実現するべく全学的な国際化事業を進めております。

この事業において、本学には、高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積」を基盤として地球規模課題に対する解決策を提示し、国際的リーダーとなる人材の育成を目指し、留学生にも日本人学生にも、魅力ある勉学の場を実現することが要求されているのです。それによって、たとえ短期間でも、筑波大学に留学した外国の学生たちが、本学を「母校」と感じてくれるような温かい雰囲気での国際交流が達成できることを期待するものであります。



# 筑波大学附属学校の現状と課題

国立大学法人筑波大学理事・  
附属学校教育局長

阿部 生 雄



学校の在り方を検討し、初等中等教育改革を先導的に推進」というものである。しかし、文部科学省は、第二期中期目標・中期計画を策定するに先立って、有識者による「国立大学附属学校の新たな活用方策等に関する検討とりまとめ」を、平成21年3月26日付で参考資料として、附属学校

## 特集Ⅱ



附属中学校の学芸発表会から

## 筑波大の第二期中期目標・ 中期計画と附属学校

筑波大学は、小学校、中学校、高等学校、中・高等学校、総合学科制の高等学校という、それぞれ特色を持つ6校の普通附属（駒場中・高等学校は2校として数える）と、視覚特別支援学校、聴覚特別支援学校、大塚特別支

援学校、桐が丘特別支援学校、久里浜特別支援学校の5校の特別支援学校がある。これら11校の附属学校の概要はP7～9下欄を参照されたい。

このように多様な学校種にわたる附属学校を擁する国立大学は（私立大学を含めても）他には存在しない。周知のように、筑波大学は、師範学校（明治5年9月）、東京師範学校（明治6年8月）、高等師範学校（明治19年4月）、東京高等師範学校（明治35年4月）、東京文理科大学（昭和4年4月設置に伴い東京高等師範学校はそこに附置される）、東京教育大学（昭和24年5月）、筑波大学（昭和48年10月）、国立大学法人筑波大学（平成16年4月）というように推移してきた歴史を持つ大学である。

現在、国立大学または学部の附属学校は262校あり、約9900人の児童生徒が在学している。そのうち非教員養成系大学に附属する学校は45校で、筑波大学の11校はこれに含まれる。

ここでは、筑波大学と附属学校について中期目標・中期計画との関連から見ていこう。

### 全国の「拠点校」と地域の「モデル校」

筑波大学は平成21年度、法人化後6年を経て、第二期中期目標・中期計画を新たに策定する年に当たる。第二期中期目標は、「児童生徒の心身の発達に応じた教育の実践を通じ、大学の教育研究に積極的に協力し、大学との連携をより強化。社会の要請や環境の変化に応じた附属

を擁する大学の担当理事宛に送付した。

その中の「附属学校の存在意義（役割）の明確化」の項目では、全国の「拠点校」と地域の「モデル校」という重要な2点が指摘されている。第一は「国立大学の附属学校である特性を活かし、大学と学部の人的資源を活用して、公立学校で実施するものとは異なる先導的・実験的な取り組みを中長期的視点から調査・研究する（拠点校）」として国の教育政策推進に寄与すること」とされ、第二は「地域の教育の（モデル校）」として、地域の教員の資質・能力の向上、教育活動の一層の推進に寄与すること」とされている。現在、さまざまな地域の地方教育委員会が先導的で実験的な教育を試みている昨今、国立大学の附属学校が更に先導的な「拠点校」や「モデル校」を追及し、発信し続ける責任と役割は重い。

### 大学との緊密な連携と協力体制

現在、筑波大学附属学校教育局は、先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点の三つの拠点構想を実現するために、教育局の体制の中に三つの部署を設けようとしている。それらの部署を中核として、大学と附属学校の密接な連携の下で、今後の筑波大学の先駆的な附属学校教育の試みを展開していこうとしている。

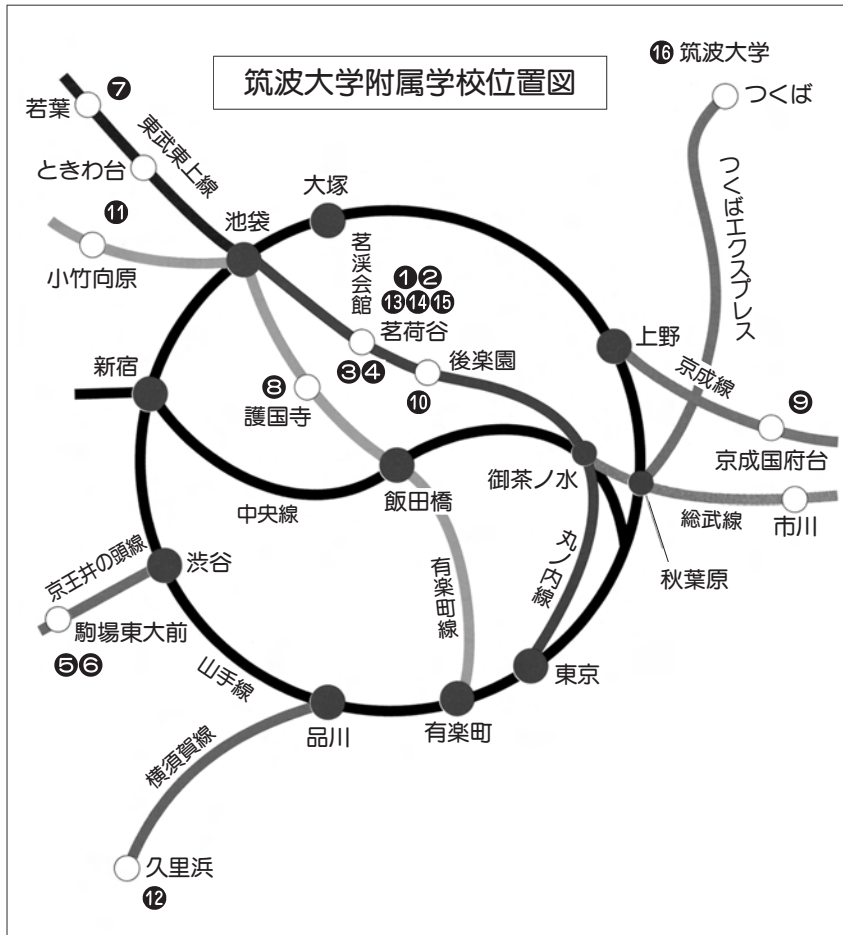
附属学校教育局が掲げた中期計画の第一の柱は、大学との緊密な連携と協力体制を構築し、附属学校の特性に応じて学校教育の今日的課題に関する大学との共同研

究・共同事業を推進するとともに、大学教員による附属学校の積極的な支援を行うというものである。その第一の具体的施策は「大学と附属学校との連携委員会や指導教員制を充実・強化する」ことであり、第二は「附属学校教員による大学の授業実施や大学教員による附属学校の授業実施など相互協力等を重視すること、そして第三は「大学と協力し、教師教育の充実及びオリンピック教育の実施を検討する」を挙げている。

平成22年度の重点的な取り組みは、①大学と附属学校との連携小委員会の定期開催や指導教員による附属学校への指導助言、指導教員を中心とした附属学校教育プロジェクトを実施すること、②教職に関する科目等への附属学校教員の協力を拡充、大学教員による附属学校への出前授業の充実、③「科学の芽賞」等の出版事業、そして④教育開発研究機構と協力し、小学校教員養成課程を含む教師教育の充実及び国際平和教育としてのオリンピック教育の実施を検討してゆくことに取り組む予定である。

### 三つの拠点構想

中期計画の第二の柱は、「基礎学力の向上を目指す効果的なカリキュラム開発などの先導的教育拠点、教員の



指導力向上のための高度な教師教育拠点、及び国際化対応能力を培う国際教育拠点として、それぞれの実験モデルを構築し公表する」という、いわゆる「三つの拠点構想」と呼んでいるものである。第一の具体的施策は「12年一貫教育及び大学との接続教育を視野に入れた教育内容・方法を開発・試行実践し、その成果を公表する」こ

## 筑波大学附属学校の概要

**附属小学校** 附属小学校は、旧昌平黌の跡地に、明治6年1月に師範学校練習小学校として設立されて以来、筑波大学の前身校の附属学校であり続けた学校である。いわば近代日本の開闢を告げた小学校である。今年で138年の歴史を刻む、日本を代表する「国立」の附属小学校である。附属小学校は教科担任制を重視した指導体制を採用し、現在、「子ども力を高める」というテーマを展開している。全国的に注目度の高い学校で、授業研究や研究発表会には多数の参加者を引きつけている。

**附属中学校・高等学校** 附属中学校と高等学校は、明治21年9月に、高等師範学校の尋常中学校として創設された。昭和22年4月に新制中学校となり、昭和24年5月に男女共学の東京教育大学附属中学校、東京教育大学附属高校となり、昭和53年4月に筑波大学附属中学校、筑波大学附属高校となった。附属中学校は、中学校の教育に関する先導的な試みを展開する一方、教育課程研究所を構内に設置し、国内外の教育関係文献や調査報告書を集積保存している。附属高校は生徒の心身の発達や進路に応じて高度な普通教育を行うことを主な目的としているが、国際交流や伝統的な学校行事や部活にも特色を持っている。大塚地区にある附属小学校、附属中学、附属高校は、現在「小中高一貫カリキュラム」のテーマを追求している。

**附属駒場中学校・高等学校** 附属駒場中学校・附属駒場高等学校は、東京農業教育専門学校附属中学校として昭和22年5月に開設された。東京教育大学東京農業専門学校附属中学校（昭和24年5月）を経て、昭和27年4月に東京教育大学附属駒場中学校、同附属高等学校となり、昭和53年4月に筑波大学附属駒場中学校、同附属高等学校となった。現在は「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の指定を受けており、また「学業」、「学校行事」、「クラブ活動」という3つの教育機能を重視した教育を展開している。また、ケルネル田圃での田植えなどの特色ある行事を行っている。



と、第二の具体的施策は「全国の教員を対象とした高度な実践科学に基づく「授業研究」の公開と、教員免許状更新講習の実践モデルを開発・発信すること、そして第三の具体的施策は「短期留学制度の整備と充実及び海外教師教育への貢献等の国際教育を推進する」ということを掲げた。

この第二の柱での平成22年度以降の重点的な取り組みは、①小中高大教員の交流研究に基づいた「小中高一貫カリキュラム研究」の実施、②全国の学校教員を対象とした「授業研究」等の公開、研究発表会等、研究成果の公表・検証、③教員免許状更新講習の「附属学校実践演習」等の充実、④「国際教育研究室」（仮称）を設置し、アジアなどの海外学校の教員や生徒との交流を推進、附属学校の生徒の短期留学を試行する、という点を掲げている。

### 特別支援教育の先導的実践

中期計画第三の柱は、「特別支援教育の全国的な教育研究拠点として、大学及び附属諸学校相互の連携・協力体制及び相談・支援体制を構築し、超早期教育や交流・連携などの先導的実践を実施する」というものである。その具体的な施策は、①特別支援教育の統合キャンパスの実現に向けた検討を開始する、②発達障害のある児童・生徒への教育相談・支援体制を充実する、③附属の特別支援学校と小・中・高等学校の交流連携を充実するという三つである。それぞれに対応した平成22年度以降の重点施策は①特別支援教育の統合キャンパスへ向けた検討、②知的重複障害児の超早期段階（0〜2歳児）での指導方法のモデルとなる先駆的な教育研究を実施、③発達障害のある

児童・生徒への教育相談に関する専門家チームの整備、④特別支援学校と小中高との交流及び共同学習、教員の連携に関する実践的な実施、を挙げている。

以上の中期目標・中期計画とそれを実現するための平成22年度以後の取り組みにあたっては、国の運営費交付金が政権交代後も減少しつつある現在、今まで以上に存在感のある「拠点校」と「モデル校」を構築するためにも、科学研究費補助金や研究開発学校制度やSSH（スーパーサイエンスハイスクール）などの指定校及び「中核的拠点育成プログラム」などに意欲的に挑戦して行くことが肝要だと思っている。国の教育政策と教育を先導する「拠点校」、地域に高水準の教育をもたらす「モデル校」、そうした両方の役割を担うことが、教員養成と教育学理論構築の面で、日本で最も古い伝統と多様で先進的な附属学校を有する筑波大学に課せられた任務であると思っている。



⑤ 附属坂戸高校

⑥ 附属大塚特別支援学校

**附属坂戸高等学校** 坂戸高校は、昭和21年4月に、埼玉県入間郡坂戸町の1町5ヶ村組合立坂戸実務学校・坂戸実修女学校として設立され、昭和23年9月に農業科、家庭科を置く組合立坂戸高等学校を経て、昭和28年8月に東京教育大学坂戸高校となった。昭和39年4月には、農業科、機械科、家政科、生活科を置く全日制専門学科高等学校となったが、昭和53年4月に筑波大学附属坂戸高等学校を経て、平成6年4月に全国で初めての総合学科としての「総合科学科」に改編された。キャリア教育を重視する総合科学科の学校として、「産業社会と人間」、「産業理解」、「起業基礎」等の特色ある科目を開発し、大学との連携、国際交流に重点を置いている。

**附属視覚特別支援学校** 附属視覚特別支援学校は、明治8年5月に組織された盲聾啞教育の祖たる楽善会にその起源を持ち、明治9年12月に皇室から御下賜金を受け、この時を楽善会訓盲会の創立としている。明治17年5月には訓盲啞院と改称し、明治18年11月に文部省直轄となった。東京教育大学附属盲学校となったのは昭和25年4月で、昭和53年4月には筑波大学附属盲学校となり、平成19年から今日の筑波大学附属視覚特別支援学校となった。わが国唯一の国立の視覚特別支援学校で、幼稚部、小学部、中学部、高等部があり、また鍼灸手技療法科、理学療法科、音楽科といった専攻科を置いている。

**附属聴覚特別支援学校** 附属聴覚特別支援学校の歴史は、その初期は視覚特別支援学校と一緒にあるが、明治43年に東京聾啞学校と改称され、昭和21年に現在の地（市川市国府台）に移転した。昭和25年4月に東京教育大学国立ろう教育学校の附属ろう学校となり、翌年に東京教育大学教育学部附属ろう学校となった。昭和53年4月に筑波大学附属聾学校となり、平成19年に現在の附属聴覚特別支援学校となった。幼稚部、小学部、中学部、高等部の他に、専攻科として造形芸術科、ビジネス情報科、歯科技工科を置いている。

**附属大塚特別支援学校** 附属大塚特別支援学校は、明治41年10月、東京高等師範学校附属小学校の補助学級として設置されたことに始まる。大正9年には小学校の再編に



## 今後の教育政策展望

東京高等師範学校、東京文理科大学の跡地に、東京教育大学時代のE館・G館があるが、2010年度に装いを新たに改築される。その間、附属学校教育局は文京区立第五中学校に引越す。来年度当初には、新築6階の建物に戻る。そこには、附属学校教育局、夜間大学院の諸専攻、つまりビジネス科学研究科の博士前期課程（経営システム科学専攻と企業法科学専攻）、博士後期課程（企業法科学専攻）、人間総合科学研究科の修士課程（スポーツ健康システム・マネジメント専攻）、博士前期課程生涯発達科学専攻、博士後期課程生涯発達科学専攻、その他に特別支援教育研究センター、教育相談室、理療科教員養成施設、放送大学が従来通りに戻り、新たに秋葉原から法科大学院が移り取まる予定で、地下1階地上6階の一大生涯学習センターが完成することになる。

大塚地区の筑波大学東京キャンパスに大きな変化がもたらされると同様、日本の教育にも大きな変化が訪れているように思われる。「ゆとり」の教育から「知識、道徳、体力」のバランスのとれた「生きる力」を育成する教育をめざす新しい小学校学習指導要領・中学校学習指導要領が2008年3月に告示され、2011年からの施行を控えている。また、2009年3月には高等学校学習指導要領、特別支援学校学習指導要領が公示され、2013年度（一部はこれよりも早く）に施行される。また、2006年12月に自民党政権下で公布された改正「教育基本法」も、昨年8月の政権交代により、民主党の「日本国教育基本法」が再

度浮上して見直し議論がもたらされるかもしれない。実際、民主党政権の誕生以来、官僚主導から政治主導へという流れの中で、教育政策は大きく転換しつつあり、教育の継続的側面が軽視される傾向があるように思われる。継続・発展を視野に計画していた教育現場の取り組みは、政治主導の事業仕分けによって見直しを迫られることになる。しかし、高校無償化、低所得者への奨学金や給付金の充実という、学校教育にとつての順風が生まれていることも確かである。その他、多くの教育政策議論が今後もたらされそうである。六年制教員養成課程、教員免許状更新講習の存廃、教職員定数改善、等々である。いづれにしてもわれわれ教育関係者は、そうした政策議論に積極的に関与することが求められる。

茗溪会会員諸氏ならびに関係者の筑波大学および附属学校への強力なご支援とご協力をお願いする次第である。



附属桐が丘特別支援学校の運動会から



附属駒場中学校ケルネル田圃での田植え

より補助学級は第5部となり、昭和35年4月には東京教育大学教育学部附属大塚養護学校が設置された。昭和38年4月には幼稚部から高等部まで一貫制の学校として整備され、翌年、現在の後楽園近くに移転した。昭和48年4月、東京教育大学附属大塚養護学校となり、昭和53年4月、筑波大学附属大塚養護学校、平成19年4月に筑波大学附属大塚特別支援学校となった。平成18年度から「特別支援教育時代のカリキュラムとは―自立と社会参加をめざす教育内容と学習計画」をテーマとした研究を推進している。

**附属桐が丘特別支援学校** 桐が丘特別支援学校は、昭和27年9月に、社会福祉法人肢体不自由児協会経営の整肢療護園から要請を受けて、東京教育大学から2名の講師を派遣することにより開設された。昭和29年4月、東京教育大学附属小学校に肢体不自由児特殊学校を新設し、昭和33年4月に東京教育大学附属養護学校として開校した。昭和35年4月には東京教育大学教育学部附属桐が丘養護学校と改称され、昭和48年4月に東京教育大学附属桐が丘養護学校となった。この間、昭和34年4月に中学部、昭和42年7月に高等部が設置された。昭和53年4月に筑波大学附属桐が丘養護学校となり、平成19年4月から筑波大学附属桐が丘特別支援学校と改称された。現在、「一人一人に応じた指導と支援の充実・脳性まひ児の障害特性をふまえた教科指導のあり方」を研究課題としている。

**附属久里浜特別支援学校** 久里浜特別支援学校設立の端緒は、昭和42年7月、文部省に設けられた特殊教育総合研究調査協力者会議が、特殊教育総合研究機関の設置と関連して、附属実験教育研究施設を付設する必要を報告したことに遡る。昭和48年9月に国立久里浜養護学校が設置され、平成16年4月に国立大学法人筑波大学に移管されて筑波大学附属久里浜養護学校となり、平成19年4月には筑波大学附属久里浜特別支援学校と改称された。附属久里浜特別支援学校は、知的障害を伴う自閉症の幼児・児童に対して、幼稚園及び小学校に準ずる教育を行い、その障害を補うための知識や技能を授けると同時に、特別支援学校の教育課程改善に関する研究を行っている。また、全国の自閉症教育のセンターとしての活動を推進している。



# 第14回 茗溪・筑波グランドフェスティバル開催



茗溪・筑波グランドフェスティバルは今回で第14回を数え、2010年1月30日(土)に筑波大学学生会館で開催されました。本大会から、関係各位のご助力により、名実ともに筑波大学と茗溪会の共催として開催できることになりました。新たな発展を期す重要な大会になるとの認識のもと、実行委員会、学生委員会と活発に議論を進め、企画運営にあたり、当日の学生スタッフにも多大な協力を受けました。

実行委員長 新井達郎

## 茗溪・筑波 グランドフェスティバルを 「楽」しむ

1月30日は昨年の強風とは異なり、比較的晴天に恵まれました。当日の参加者約270名、参加費を払っていただき当日都合で来られなかった方も含めると約300名の方から参加へのご協力をいただきました。

本フェスティバルは、筑波大学と前身の諸学校・大学の卒業生・修了生などが、世代を超えて交流し、親睦を深め、同窓の輪を拡げることを目指して開催されるようになったものです。第7回大会までは、大塚キャンパス、茗溪会館を中心として東京地区で開催され、第8回大会からは筑波大学と東京地区の隔年開催になっていました。その後、総合交流会館のオープンやつくばエキスポレスの開通などがあり、筑波大学での連続開催に関して、関係者のご協力が得られたため、昨年の第12回、13回大会の筑波大学開催に引き続いて、今年の第14回大会も筑波大学で開催致しました。本年度のテーマは「楽」です。このフェスティバルを核にして、茗溪と筑波大学および関連する方々の絆を密にするとともに、共に楽しむための同窓組織として発展させていけることを考えて、このテーマに致しました。

当日は12時から展示企画を行い、13時30分から講堂でオープニングセレモニー、14時からシンポジウムを開催しました。展示企画は、「嘉納治五郎のレガシー」展を誕生150周年を記念して企画しました。

## オープニングセレモニー



挨拶する山田学長、西野理事長

オープニングセレモニーでは、最初に大会会長の筑波大学学長の山田信博先生の大会開催のご挨拶があり、その後、茗溪会理事長の西野虎之介氏からご祝辞をいただき、最後に、実行委員長の新井達郎より企画の説明と支援に対する謝辞を申し上げました。昨年末では、筑波大学には各種後援をいた



実行委員長 新井達郎教授の挨拶

だき、茗溪会からは、援助金ならびに、ご支援をいただきました。今年は、茗溪会と筑波大学の共催として開催することになった旨、オープニングセレモニーでも紹介がありました。

## シンポジウム「独創性の入口とは」

シンポジウムでは、「独創性の入口とは」と題して、基調講演とパネルディスカッションを企画しました。基調講演は一倉宏氏にお願いしました。一倉宏氏は、本学第一学群人文文学類の1期生で、コピーライター・クリエイティブディレクターのお仕事をされておられます。一倉宏氏は、「きれいなおねえさんはすきですか」「どこまで行ったら、未来だろう」「愛に雪、恋を白」「うまいんだなあこれがっ」など、各種のキャッチコピーで有名であり、「ことば」世界と私に架ける橋「独創性の入口」そして「出口」と題する講演を45分間行っていたいただきました。「ことば」は「できそこないのドラえもんである」から始まり、「ことば」は、「相棒」であり、そこには、「可能性」と「限界性」があると話され、ことばと社会、創造性、独創性について話を展開されました。さらに、「ことば」を仕事にされてこられた事例をもとに演題に



### シンポジウムの先生方

写真左上から 井田仁康氏(大学院人間総合科学研究科教授)、一倉宏氏(コピーライター)、小中大地氏(人間総合科学研究科2年)、原忠信氏(人間総合科学研究科講師)

ある「架け橋」の試みについて話されていきました。あつという間に、講演時間が終わってしまったという印象を受けました。

その後、第2部として、パネルディスカッションを行いました。パネリストを兼ねた司会を井田仁康先生(大学院人間総合科学研究科教授)、パネリストとして、一倉宏氏、原忠信氏(人間総合科学研究科講師)、小中大地氏(人間総合科学研究科2年)に参加いただき、1時間30分議論をしていただきました。その間、会場からの質問も含めて活発な質疑応答があり、多くの参加者は満足されたようでした。今回、一倉宏氏が言葉の大切さ、原忠信氏が「爽健美茶」のラベルの考案等図案について、小中大地氏が妖精造形として作成しているゴブリンへの思いなど、井田仁康先生の軽妙な司会により、極めて盛り上がったパネルディスカッションになりました。

このように、4人のパネリストの方々には、ご自身のこれまでの研究経歴、製作経歴から、周囲の人達との関わりも含めて、お話ししていただき、あつという間に時間が過ぎてしまった印象でした。講演後、いくつか会場からも質問やご意見をいただき、会場と一体となった、有意義な時間で聴衆は大いに満足されていたようでした。

### 「嘉納治五郎のレガシー」展

恒例の展示に関しては、「嘉納治五郎のレガシー」展と

題して、大学会館ホール前ホワイエで12時から17時まで出展がありました。生誕150年を迎えた記念の展示は、先生の業績を偲んで、参加者の関心を集めた展示でした。

茗溪・筑波ランドフェスティバルの当日に、フェスティバル参加に合わせて、同窓会、同期会、OB・OG会の企画の募集を行い、会場の手配等便宜をはかり、茗溪・筑波ランドフェスティバルをさらに活発な広がりのある大会にする企画を今回も募集しました。文科系サークル連合会OB・OG会が実際にこの機会を利用して同窓会を行い、茗溪・筑波ランドフェスティバルにも同時参加されました。今後、多くの方が本フェスティバルと一緒に同窓会を開催し、盛り上げていただきたいと思います。

### 世代を超えた交流を—懇親会

懇親会は第一エリア食堂において17時00分から開催され、大会副会長の西川潔副学長の挨拶、参与の江田昌佑茗溪会副理事長の祝辞につづき、7名の関係者による鏡開き、鈴木久敏副学長の乾杯などのあと、世代を超えた交流を楽しみました。最後に恒例の宣揚歌を実行委員藤室良明氏の指揮のもと全員で輪になり肩をくみ斉唱し、筑波大学と同窓会茗溪会の発展と来年の再開を約束して散会となりました。今年の特徴と



世代を超えた交流

寒さの中、開催された第14回大会も出席者の方々から好評をいただき、今後とも発展させて行くように激励をうけました。これもひとえに関係され、陰に陽にご援助ご協力いただきました関係各位のおかげです。

とりわけ、西野虎之介理事長をはじめとする茗溪会本部の皆様方、山田信博学長並びに筑波大学本部の皆様方、大学会館の職員の皆様、教職員各位、紫峰会の職員の皆様方からは、物心両面のご援助とご協力をいただきまして、厚く御礼申し上げます。筑波大学と茗溪会の共催として本フェスティバルが初めて開催された記念すべき大会が成功の内に終了することができました。

茗溪会の年配の方々、現役の学生さんにたくさん話かけていただき、その後も、メールのやり取りなどで、年代を越えて交流を深めつつあることを後日談として伺いました。ランドフェスティバルを筑波大学の現役学生と同窓生との交流の場としてさらに発展させていくことが出来ますよう、皆様方の一層のご支援をお願い致します。



# 茗溪会／公開講座から

## 本部および支部で開催

茗溪会公開講座

### 色を科学する

～生活の中にある光と色の不思議

講師 新井達郎

(筑波大学大学院教授)

12月5日(土) 茗溪会館



試験管で発色の実験を演示

生き物は、ものの色をどのように見分けるのか。虹や蛍の光などの解明から、目でものを見る視覚の不思議を解き明かす光化学を、新井先生に講義していただいた。先生は試験管での実験をいくつも示され、次のような内容のお話をされた。

色を見るためには光がなくてはならない。色は光と化学物質の作用からできており、光は波として表されるが、あるエ

ネルギーをもった粒子でもある。色を示す物質の状態を光のエネルギーを使って変えることができる。それは物質をつくっている電子を光エネルギーが動かしていることだ。このような光化学的な変化として、光合成や視覚、写真やコピー、日焼けなど多くの例があげられる。具体的な光化学の応用として、新生児の黄疸を軽減する光療法がある。新生児の黄疸の原因となる肝臓の中のビリルビンという物質は、光を当てることにより水溶性に変化し体外へ出すことができる。ウラニンという物質をエタノール(酒)に溶かしてみると緑に発光する。ウラニンは白色光を吸収して長波長の色に変わったわけだ。蛍光塗料入の洗剤で洗ったワイシャツがモヤッと青いのはこのことによる。がん細胞の検出などでもこの原理が応用されている。色のもとになる物質の分子は光を吸収すると、光のエネルギーを受け取り活性な状態になる。これを励起状態という。ふつう励起状態は短い時間でなくなるが、夜光塗料は集合体を用いて戻る時間を長く引き延ばしたものであるので、長い間発光が観測できる。

次に、紫外線をあてると色が変わる実験をする。光をあてることにより色が変わることをフォトクロミズムという。何万回も繰り返すことができるので、情報の書き込み読み出しに使うための研究が多くの人によって進められている。ノーベル賞受賞の「おわんクラゲ」も、カルシウムイオンが関与した化学変化の途中で青い光を出すことから始められた研究だ。この光をグリーンフルオロセンスプロテインが吸収して緑の光を出すのだ。雨上がりの天空に大きく弧を描く虹は、空気中の水滴がプリズムの働きをし、太陽の光が波長による屈折率の違いにより分光して七色に見える。人間の眼の中にロドプシンという3種類くらいのタンパク質があって色を見分けているのである。

この他に新井先生は、蛍の発光や血液反応で使われるルミノール反応など、身近な例を次々とあげてその仕組みを説明し、最後に、太陽光のエネルギーを使って電流を取り出し太陽電池に蓄える技術についてふれ、これからのエネルギー源として注目されることを述べられた。

参加者からの質問では、「太陽光によってひまわりの花の大きさや色が違うのはなぜか」、「ホワイトを日本語では白色光というが、実体は白なのか透明なのか」、「色は人間の眼の特質によるのか」、「色は違う色としてみているのか」、「色と光は違うのか」など活発な質問があった。「光は物質量でもあり、色と情報運ぶキャリアである」などの回答があった。

山梨支部教養講演会

### ワイン発祥の地 甲府

講師 萩原健一

(株式会社サドヤ社長)

12月5日(土) KKR甲府ニュー芙蓉



平成21年12月5日(土)、13回目となる年末恒例の山梨支部教養講演会を開催。今回は生産量日本一である

山梨の地場産業のワインをテーマに、大正6年創業(株)サドヤ社長 萩原健一氏(46歳)を講師に迎え、次のようなお話をいただいた。

日本のワイン作りは、明治政府の政策から始まり、明治3年には日本で初めてのワイン醸造が甲府で行われ、明治10年には現在ぶどうの産地として有名な勝沼の2人の青年がフランスへ留学するなど、ぶどう栽培とワイン醸造は山梨を中心に盛んになった。昭和の中頃までは酸味に馴れない日本人の味覚に合わせた日本独特の甘味ワインが全盛だった。その後、辛口ワインへと移行。これは日本だけではなく、アメリカやニュージーランドといったワイン後進国に共通した傾向だ。昭和39年の東京オリンピックを境にワイン市場が本格的に拡大し始め、いくつか

のブームを経て現在は国民一人あたり年3ℓに近づくところまできている。サドヤは70年前から自家農園でフランスワイン専用品種を栽培し、世界品質のワインを目指して取り組んできた。日本のワインの父といわれる川上善兵衛が著したぶどうの本の中には、現在でも資料として一線級のものがある。数年前の資料ですら情報としては古くなる科学の世界においてははきわめて稀なことだ。当時のワイン作りにかける思いにはただ感嘆するばかりである。

「良いワインは良いぶどうから」……ほかの酒は乾燥した穀類から作られるが、ワインは生鮮のぶどう果実を使うため、ぶどうの品質が出来上がり品の品質を決定的に左右する。このため、ぶどうの品種を覚えておけばある程度ワインの味について語る事ができる。

フランスは肉・乳脂肪の消費量が高い割に心臓病の死亡率が低いという「フレッチャレドックス」の謎が91年に解明された。赤ワインに豊富に含まれているポリフェノールが動脈硬化を予防する酸化作用をもつことがわかったからだ。その後の研究でも健康に良い様々な効果があることがわかっていく。ゆつたりとした気分が食事を楽しみながら、適度な飲酒をすることが健康の秘訣なのだ。

次から次に飛び出すワインの話題と萩原さんの話術に、時間はあっという間に過ぎた。質疑応答ではポリフェノールの効果についてなど積極的な質問が数多くあった。

報告 山梨支部 長沼武志(07 筑修教)

北海道支部新春教育講演会

## 国際宇宙ステーションの完成 次への飛躍

講師 澤岡 昭

(大同大学学長・宇宙航空  
研究開発機構技術参与)

1月9日(土) 札幌全日空ホテル

北海道支部が主催した「新春教育講演会」は、支部会員のほか、高校生やOB等が参加して開かれた。

約80分の講演は、講師の今までの生い立ちや、主に国際宇宙ステーションを中心とした宇宙研究開発事業への関わりのお話であった。主な内容は次のとおり。

幼い頃から生物学に興味を持ち、札幌西高校では生物部の部長を務めていた。北大に入り、当時流行の原子力に興味を持ち、その後物理学研究に転じた。大学



ディスカバリー号コリンズ船長(右)と握手

院博士課程を経て、大阪大学で基礎工学部の助手となった。40代になって、スペース・シャトル実験の話が本格的になった頃から宇宙研究に強く興味を持つようになった。1979年に宇宙開発事業団に入り、以後本格的に宇宙開発に関わるようになったが、最終的な夢は、自らが最高齢の宇宙飛行士になること(今まではアメリカ人77歳のジョン・グレンさんが最高齢)であり、ここ十年ほどはそのための節制を続けている。

昨年の段階で国際宇宙ステーションはほぼ完成し、今年スペースシャトル4回の打ち上げの後に完全に完成する。現在野口飛行士が日本の実験モジュールに長期滞在中である。

それまでの宇宙開発に関する日本人の関わりについて述べると、1986年に日本人宇宙飛行士候補が3人に絞られた。その中に毛利衛さん(核融合研究者)や向井千秋さん(医師)がいたが、自分は宇宙開発事業団(NASDA)のスタッフとして、彼らとアメリカで週1回ゼミを開き、約1年間研究を共にした。その時から日本人初の宇宙飛行士は毛利さんか向井さんと考えられており、この二人はライバルとしてゼミでも議論を激しく戦わせていた。

毛利さん・向井さん・土井さん・若田さん・野口さんを第一世代の宇宙飛行士とすると、現在は第二世代の宇宙飛行士の時代になりつつある。

国際宇宙ステーション(ISS)の完成は83年のサミットでアメリカから呼びかけられ、日本は24年前に参加を決定した。当初は対ソ連(ロシア)的な色彩が強く、ロシアを排除していたが、ロシア

の科学技術の協力が不可欠であり、現在はロシアを含めての国際協調のもとで行われている。

宇宙ステーションは重さ約450トンで12年前にロシアのモジュールを打ち上げ、それにアメリカのモジュールや日本の「きぼう」などをつなげる形で開発された。この組み付けには土井さん、星出さん、若田さんなどが関与した。

若田さんは現在日本の宇宙飛行士の中心となっているが、性格的に非常に温厚であり、人望もあり、外国人として最初の国際宇宙ステーションの艦長になる可能性がある。

山崎直子さんは今年の3月にスペースシャトルに乗るが、彼女はエンジニアで遠心装置の開発を行ってきた。しかし、遠心装置は経済的理由で中止になった。宇宙飛行士としてスペースシャトルに乗ることが危惧されたが、NASAは彼女を宇宙飛行士とすることを決定した。

日本の新しい宇宙飛行士候補者として3人が決定したが、新しい傾向がある。それは元自衛官であったり、元全日空のパイロットであるという飛行のプロであるということである。このことは飛行士が技術者から飛行のプロへ転換するという流れを示しているが、まだ芸術家や文系の人間が乗っていないので、その事が今後の課題だ。宇宙ステーションは多様な文化が混在する場所になるが、その文化の違いをどのように融和・調和させるかも今後の課題と考えられる。

このような流れの中で自分が宇宙飛行士になるのは大変だが、頑張っって夢を実現したいと思っている。

日本は観測技術・衛星利用という面に



関して世界でもリーダー的な存在である。今後自国の技術だけで宇宙飛行士を飛ばせるかが課題だが、その為には経済的な面や危険に対する国民の理解が大前提にならなくてはならない。

（報告 北海道支部 柳沢 聡(01筑二日)）

若溪会公開講座

# 中高年の健康神話を検証する

講師 古藤 昭子

(NPO法人 産業健康振興協会理事長)

2月13日(土) 若溪会館

茨城県取手市の「生命の樹」の取り組みは、平成15年から継続して実施されている「心と体の健康づくり」推進事業である。取手プランの診断表(グラビア参照)は、その人の内臓年齢や栄養、体力に加えて、精神エネルギーなどの項目での診断が、わかりやすい絵で表現されている。この事業でカウンセリングを担当する古藤昭子さんが、中高年の健康問題について次のような内容で講演した。

ボタンを一人でかけられるか、靴下を一人ではけるか、お箸は上手に使えるか、歩行中につまずくことが多くなつたかなどは、自分の筋肉と神経の働きの協応作業に異常があるか否かのチェックになる。「フリルレロ」「タチツテ」と声を出してみても、口や舌の筋肉の力は保たれていても、不明瞭な発音しかできないときはには要注意。これらは、いずれも脳卒中の初期のシグナルである。

頻尿のために水分はひかえめという間違つた神話が流布され、「ハルンケア」などの文字が先走りしているが、人間は加齢に従って喉の渇きに鈍感になる。脱水状態は血栓を作りやすくするため、1日に2ℓの水分を摂ることが大切だ。「塩分ひかえめ」という神話も定着し、良民は確実に実行している。それは、以前の日本人は栄養状態が悪く、しかも塩分を大量に摂取していたために血管が脆く、血圧の高さとの相乗効果で脳出血が



「日常生活の中のシグナルを見落とさないで！」

統計上多くみられたのが原因である。しかし、栄養状態は近年著しく改善しており、塩分は身体の調整力として欠くことはできないことを忘れてはならない。昔、柿の木に美味しい実をならせるため塩カマス(カマスを根元に埋めたり、金魚が弱ると少量の塩を入れたことなどは良い例である。

また、わが国ではコレステロール値が220mg/dlを超えると高コレステロール血

症とされ、なんと国民の5.6人に1人の確率だ。特に55歳〜74歳の女性では2人に1人が高コレステロール血症とされ、治療薬の年間販売額は3,000億円を超えている。正常値の目安を3年前の240にするだけで、何と対象者は1,000万人にまで激減する。正常値を上げることには心配があると思われるかもしれないが、30年前は250だった。また世界のスタンダードとされる米国でも、40代は245未満、50歳を超えると265を正常値としている。やれ卵や肉を減らせとコレステロール防止にかしましい。年齢別基準値設定ぐらいの研究と努力をしたらどうだろう。同じことは血圧でも言えそう。薬の投与にしても、年齢、性別、そして生活習慣は一向に加味されていないようである。小がらなおばあさんも大がらな成人男子も、成人ということ薬の量が同じだというのはどうであろうか。

さて、取手の「生命の樹」では、ライフアップの運動としてウォーキングを中心に、個人別に、速さ、時間、頻度が処方される。太腿の太い筋肉を動かすことは、ミルキングといつて牛のお乳を搾る原理で、脚の血管がポンプの役目をして血液の流れがよくなることに役立つ。実際に脳へ行く血液の流れもよくなるので、酸素と脳の唯一のエネルギー源であるブドウ糖も十分に供給され脳も元気になる。大切なことは14億もの脳神経細胞が刺激されネットワークが作られ脳の活性化が起こることだ。あわせて美しいとか楽しいとか自然に対する感動が、快感物質のドーパミンが分泌されやすくなる脳内環境をつくり、ボケ防止にもつながっている。

年齢を取ると「キレ」や「がまん」できなくなるのとよく言われるが、脳内の神経伝達物質のひとつであるセロトニンが注目されてくる。ウォーキングはセロトニンを増やし、「キレ」防止にも有効だ。

評価レベル	体 力					
	2007年度			2008年度		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
1	4.0%	1.7%	2.7%	2.3%	1.2%	1.7%
2	9.1%	2.5%	5.4%	3.4%	1.9%	2.5%
3	38.2%	26.5%	31.6%	29.6%	16.4%	22.1%
4	23.2%	27.8%	25.8%	24.6%	22.6%	23.4%
5	25.5%	41.6%	34.5%	40.2%	57.9%	50.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(単位：%)

評価レベル	精神エネルギー					
	2007年度			2008年度		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
1	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2	0.0%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%
3	1.4%	1.2%	1.3%	0.7%	0.7%	0.7%
4	19.4%	16.3%	17.6%	16.7%	11.8%	13.9%
5	79.2%	82.3%	80.9%	82.6%	87.5%	85.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(単位：%)

取手の「生命の樹」参加者1,200名 の体力評価と精神エネルギー評価について、2007年度と2008年度の2年間の推移(表参照)をみると、体力の評価レベル5が34.5%から50.3%に、また精神エネルギーでも評価レベル5が80.9%から85.4%に伸びていることが確かめられ、特筆すべきことだと思ふ。われわれの老いには標準値もなければ、「古い」を計る総合的なものさしもない。「生命の樹」は、ウェル・エイジング(豊かな人生)からプロダクティブ・エイジング(光り輝く人生)へとチャンネルを切り換える指標を示すために、「生活処方」「運動処方」を実施した。「生命の樹」の実践は、どっこい生きていく老人たちの能力向上を明確に示してくれた。「古い」は心身の劣化ではなく、英知を身につけていく過程である」と申し上げたい。

## 平成22年度 茗溪会公益事業計画（案）

### 1. 公開講座等の開催（前年度から継続）

(1) 教養講座 対象 一般社会人、学生、生徒等

東京地区一会場・茗溪会館。つくば地区一会場・大学会館、研修センター。～ともに、個別のテーマを設定し、筑波大学教員、茗溪会理事ほかを講師に委嘱する。開催はそれぞれ年間2回程度。

また、つくば地区開催の場合は、筑波大学、地元県、市当局、教委等の後援、筑波学都資金財団、紫峰会等の協賛を得る。

(2) キャリア情報等の講座 対象 大学卒業予定者のうち就職希望者、卒業後転職希望者等。

開催期間、内容等 ①9月～3月の期間に8回程度実施 講師の委嘱、筑波大学、資金財団と共催

②3月中の3日間 研修講座の企画、実施 筑波大学、資金財団と共催

(3) 現職教育研修講座 対象 主に中高教職員等。

テーマ 教育現場で当面する課題等の自由討議。 東京各支部と共催。

### 2. 顕彰（前年度から継続）＝下記の依頼事項を参照されたい。

社会貢献功労者の顕彰。一般社会人（個人または団体）を候補対象。特に青少年を積極的に顕彰候補とする。

### 3. 追悼のつどい（前年度から継続）

日時〈予定〉9月11日(土) 会場 東京・茗溪会館

### 4. 季刊誌「茗溪」の発行（前年度から継続） 発行の時期(号) 春、夏、秋、正月

主な掲載内容・巻頭特集〈予定〉正月号・理事長とゲストの話。春、秋号・ゲストの話。夏号・総会報告。

ほかのページ・読者の投稿、公開講座のレポート、執筆依頼原稿、会見情報等。

### 5. 後援、協賛、協力等（前年度から継続） 対象 支部、関連団体等が開催する公開講座等の公益事業

以上の公益事業計画（案）は、理事会の承認、通常総会の議決を経て確定、実施される。

## 第9回「顕彰」候補者の推薦依頼について

茗溪会が主催する顕彰事業は、茗溪創基130周年を記念して始められた公益事業で、平成22年には第9回を迎えます。顕彰対象は、地域社会にあって広く社会に貢献している青少年や一般社会人です。

今回も顕彰候補者を広く全国的な視野から積極的に発掘し、下記要領により推薦してください。ただし、公益事業の趣旨から、政治家、現職の公務員等を避けるほか、現在、本部・支部等の役職にある者は候補の対象外とします。なお、本会会員であっても、その社会貢献の実績が社会的に評価されている場合は候補の対象から除かないものとします。

また、社会的客観性を高めるためにも、当該地の教育委員会、新聞社（支局等を含む）放送局あるいは関係団体、有識者、本会会員各位からの提案、参考意見等を積極的に求めてください。

#### 記

(1) 顕彰候補対象 社会貢献功労者 一般社会人（個人または団体）。特に青少年を積極的に推薦されたい。

(2) 推薦 支部および本部理事から、世代、地域、職業等にこだわらず、全国的な視野にたつて候補者を推薦されたい。

(3) 選考 推薦された候補者の中から選考委員会において顕彰対象者を選考する。  
選考委員会は副理事長を委員長とし、内（各部長）外（理事長が委嘱した有識者）の委員により構成。

(4) 推薦締め切り 候補者の推薦締め切りは平成22年9月末日とし、関係書類を本部事務局へ提出されたい。

(5) 顕彰式等 顕彰対象者を本部に招いて、顕彰式、祝賀会等を実施する。顕彰対象者の社会貢献活動の概要や横顔等は、季刊誌『茗溪』に掲載し広く周知する。前回までと同様に『顕彰録』の発行を予定する。



## 平成21年度筑波大学 芸術賞、茗溪会賞決まる

筑波大学では、平成9年度から「筑波大学芸術賞」を設け、芸術専門学群における卒業研究、および大学院修士課程芸術研究科（現在、大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻）における修了研究のうち、特に優れたものを毎年度末に表彰している。

受賞研究のうち作品については、大学で買上げる（または寄贈を受ける）ことになっているが、この制度によって収集された作品群は、芸術資料委員会で管理するコレクションの重要な一部を形成している。

平成18年からは「茗溪会賞」が創立され、以後、2大芸術賞が撰ばれるようになっていく。両賞の受賞作品等は、毎年3月の卒業式の時期に筑波大学総合交流会館多目的ホールで展示公開される。

今年度の受賞作品等および受賞者は、次のとおり。

### ◎筑波大学芸術賞 （芸術専門学群）

- ・『ヒトが両手で出来ることについて考えてみた』木彫・樟（彫塑） 渡部 直
- ・『Eineー切り紙の展示台』積層R P・ABS樹脂（情報デザイン） 田野 愛理

（大学院博士前期課程芸術専攻）

- ・『pivot-walker』ロボット構造を生かした歩行補助具（プロダクトデザイン） 國村大喜
- ・『1920年代ドイツにおける「絶対映画」の成立ーリヒターとエッゲリングの共同研究』（論文・芸術支援） 江口みなみ

板垣あかり  
高村 鈴菜  
高橋 智紀

- ・『poetree』シルクスクリーン・ミクストメディア（版画）
- ・『音文字 POP-UP』仕掛け本12点（ビジュアルデザイン）
- ・『古今和歌集 卷第十二』紙本墨書・卷子（書）

（大学院博士前期課程芸術専攻）

### ◎茗溪会賞



#### 二面性の表現

板垣あかり

私は筑波大学入学後三年目にして、それまでの周りに流されながら生きてきた自分を見つめ直し、専攻を変えてリスタートする決意をしました。今の専攻に変えてからの二年間で、私の周囲の人間関係も大きく変わり、自分の目指すものを自分の手でつかみ取っていく事を具体的に考え、自分のアイデンティティもより確立してきたように思いました。筑波大学特有の、全国、全世界の様々な学問を専攻する、様々な人々と知り合うことが出来るという利点も私に多くのことを学ばせてくれました。

今回、茗溪会賞をいただいた卒業制作作品では、並べた二つの木の絵を対峙させることで、私の人生観において影響の強いものや、私の中に内在し今後開花しうるもの、未知なる影響への期待等における二面性を表現しました。制作は構想の段階で時間を要したため、具現化していく段階は時間との戦いでした。課題も多く残りしました。しかし、この作品を通して一番表現したかった家族や大学でお世話になった様々な方々への感謝、23歳の現在まで自分を支えてくれた全ての力への感謝がいびつながら形にできたかと思えます。大学院へ進学してからもこの作品を制作した頃の気持ちを忘れず、たくさん新しい経験を全身で感じながら作品制作に活かしていきたいものです。



#### 出会い・学び・気づき

高村 鈴菜

この度は茗溪会賞という荣誉ある賞を頂き、本当にありがとうございます。大学で過ごした4年間の集大成である卒業制作で、このような身に余る賞を頂いた事を大変嬉しく思っています。

作品「音文字POP-UP」は擬音語や擬態語などの文字によるしかけ絵本です。4年間の学生生活では、総合大学である筑波大学の環

境において、芸術だけではなく様々な分野の学問や研究、そしてそれに携わる人に触れる機会を持つことができました。そのような生活の中でアートやデザインを学びながら、理屈や理論を考えるよりも、誰もが純粹にそれぞれの視点で楽しむことができる作品というものを常々考えてきました。それは同時に子供時代と再び邂逅する作業でもあり、今回の卒業制作を契機に一度その総括を行ったものであったとも言えます。今回の受賞を励みに、筑波大での4年間の出会い・学び・気づきを大切に、今後も精進させていきたいと思っています。



#### 古人との対話

平安古筆の復元を通して

高橋 智紀

「高野切」と呼ばれる現存最古の『古今和歌集』の写本は、仮名芸術における頂点を示すものです。もと二十巻の卷子であったとされ、筆跡によって第一種・第二種・第三種に分類される三人の分担揮毫（寄合書き）であるとされています。しかし、今日ではその一部を遺すのみで、その全貌を窺うことはできません。

修了研究として制作した本作品は、第一種筆者が揮毫したと推定される巻十二を復元したものです。現存する巻一（断間）・第九（断簡）・第二十（完本）から、字母の使用頻度や行間の広さ、潤濁の変化に留意しつつ文字を集め原稿を作成しました。それを基に揮毫する際は、当時の姿を想起し、第一種の趣を損なうことのないよう最大限の注意を払いました。そして、全長四・七五メートルの卷子に仕上がったときは、長い期間、悩みながら原稿を作成し、推敲を重ねつつ揮毫した甲斐があったという達成感と、先人が築き上げた芸術の一頂点に触れることができたという喜びがこみ上げました。

この度、茗溪会賞という名誉ある賞をいただくことができ、自身の喜びもさることながら、病床に臥す母への一番の孝行となりました。また、本作品だけでなく、大学・大学院での六年間にわたって丁寧にご指導下さいました森岡隆先生をはじめ、諸先生方に厚く御礼申し上げますとともに、多面にわたって支えてくれた同期の仲間、先輩方、お世話になった全ての方に感謝申し上げます。

# さよならE館・G館

平成22年2月28日に、東京教育大学卒業生及び在職経験のある教職員、筑波大学の東京地区大学院修士・教職員・附属学校教育局及び物理療科教員養成施設の教職員・卒業生を対象に、老朽化が激しく建て直されるために取り壊される大塚のE館とG館の思い出会が開催されました。

E館とG館は昭和26年から39年にかけて建設され、東京教育大学時代（昭和24年から52年度）は文学部・教育学部の学び舎として使用され、現在は筑波大学ビジネス科学研究科、附属学校教育局、放送大学等が使用しています。

E館とG館は歴史と伝統のある建物ですが、建設以来半世紀を経過して、痛みが激しく、本年4月より取り壊しをはじめ、6月から来年3月まで、地上6階・地下1階の新しい建物が完成予定とのことです。

E館・G館で共に学び、共に働いた皆さんが在学・在職中の思い出を語らいながら、世代を越えた交流の場として企画された会には100人



E館・G館思い出会の参加者～G館にて

近くの人が集まりました。会は12時から館内の見学に始まり、2時から現在に筑波大学理事・副学長で、かつてE館で研究活動にあられた鈴木久敏氏の司会ではじまり、最初に山田信博筑波大学学長の挨拶に続いて記念講演は筑波大学元学長でE館で研究活動のスタートを切ったという北原保雄氏（35国語・国文学、41修日本文学）がE館の歴史や果たした役割についてお話しされました。



北原 保雄氏

式典終了後はE館を背景に正門で記念撮影をし（グラビア参照）3時半からは茗溪会館で懇親会が持たれました。北原氏の記念講演、懇親会での阿部生雄筑波大学理事・付属学校教育局長（43体、47修教育）お話しの中に、筑波移転の時に、かつてのW館の後に現在体育館を建設した地元文京区はE館・G館の土地も欲しがっていたことや柔道連盟がE館・G館を取り壊してその跡地に「国際柔道会館」を建設したいという希望があったことなどがあり、その時には茗溪会が、E館・G館を筑波大学の施設として残すように働きかけ、成功したとのエピソードが披露されました。来年度完成する新校舎が、社会人の学び舎、生涯学習の拠点となることを期待したいものです。

## 第25回

### 教職受験対策研修会から

教職を希望する筑波大学生に対して、本会と財団法人筑波資金財団が主催する「教職受験対策研修会」が3月9日から11日までの3日間「筑波研修センター」で開催された。参加者は48名であった。

【第一日】\*開講式には筑波大学キャリア支援室長五十嵐浩也氏、茗溪会筑波大学支部長柳本雄次氏（49院博特教）のご出席を賜り、田中正造事務局長（36健）も加わって、励ましのお言葉や、いかに全国の教育関係者が筑波大学の卒業生に期待しているか等のお話を伺った。  
\*講義Ⅰ「教員採用試験の分析と対策」蛭田政弘氏（42哲学） 教育委員会が求めている教員像について  
\*採用試験合格者体験発表（今年度の合格した先輩

- ① 島根県 養護教諭 井上美紀さん（修士課程）
- ② 茨城県 中学校（国語） 木村響子さん（人文学群）
- ③ 茨城県 高校（国語） 辻 尚宏さん（修士課程）

④ 愛媛県 高校（地歴） 田代暁子さん（修士課程）  
\*論文作成および面接について事務局の高原将が要点を説明した。

\*論文作成 90分で作成。

【第二日】\*講義Ⅱ「我が国の教育の今日的な課題」飯田国雄氏（42修東史） 教育基本法と教育三法の改正・学習指導要領の改訂・生徒指導上の諸問題・学校評価などについて

\*個人面接 学生宿舍所長の高野大二郎氏（40体）研修センター所長の染谷信洋氏（43言語）と高原が面接官となり実施した。体験発表の4人に加えて、藤田力さん（博士課程 数理解物質科学研究科 茨城 高校 数学）がチューターとして加わり、合計5人が受講生に個人面接の答え方をアドバイスした。

\*集団討論の実演 5人のチューターに、明日実施する集団討論の実演を行ってもらった。

\*集団面接 受講生数人のグループに対して面接を実施した。ここでも5人のチューターがアドバイスをした。

【第三日】\*集団討論 数人で用意されたテーマについて70分ほど討論した。まず、各人が与えられたテーマについて意見を述べ、討論に入った。ほとんどの参加者が始めての経験であったが議論が白熱し、参加者からは良い体験であったとの声が多かった。

\*論文指導 初日に書いた論文を班ごとに分かれてまず本人が音読し、意図するところや考えを述べ、聞いている参加者の意見を聞き、最後に指導者からのコメントを聞くという形式で実施した。参加者からは「大変役にたった」との声が多かった。

その後、閉講式を行い予定どおり研修会を終了した。  
茗溪会事務局 高原 将（38東史）

#### 【各都道府県教育界の諸先輩にお願い】

各都道府県の採用試験情報や教育行政の最新情報について先輩方を訪ねて教えを賜るように指導しています。教員志望の筑波大学生から、相談がありましたら、論文の指導も含めて、ご指導のほど、よろしくお願ひ申し上げます。（研修担当）



# 茗溪学園だより

## 国際教育推進プログラム “SOSSEP” 英国留学報告

本学園では昨秋創立三十周年記念式典を挙行いたしました。その詳細は前号で皆様にご報告いたしました。今号では、記念事業の一つ、国際教育推進プログラムの短期交換留学「SOSSEP」(Study Overseas Student Exchange Programme)の、この1月に英国留学した5名の生徒らの報告会を開きましたので、留学中の様子や感想などをご報告いたします。

**T (女子)・・・**私達3人が行ったChrist Collegeはウェールズにあり、16世紀にヘンリー八世の勅許を得て創立された歴史ある学校です。校内には、13世紀に建てられたチャペルもあって、歴史を感じました。

**I (男子)・・・**僕は朝のチャペルが好きでした。あのなんとも言えないムードには当てはまる言葉が見つかりません。朝日に照らされるステンドグラス、パイオルガンの響き、堂内に響く賛美歌：あんな美しい朝は他にはありませんでした。

**O (女子)・・・**授業については、私はホームステイ先のジェームズ君と一緒に、数学、応用数学、化学、神学、音楽、体育に出席しました。一クラスが20人くらいで、数学と化学に出席した感想としては、同科目の中でも教わる先生が変わり、その先生によって範囲が異なるので、専門的な授業だなと感じました。また、少数数なので一人ひとりが自分の考えたことを率直に言い合えるので、それぞれの独創的な答えを聞くことができ、お互いを高めあえると思いました。

**Y (男子)・・・**僕はプリストルにあるColstons Schoolでしたが、この学校も18世紀の始めに創立された歴史あるパブリックスクールです。ヒースロー空港に着いたとき、10年に一度という大雪だったので、イギリスの雪を見ることが出来たのはラッキーだったと思います。

ホストブラザーのデイビット君の車の運転で（イギリスでは17歳から運転できる）学校に通いました。学校では、デイビットがたくさんの人に紹介してくれたので、先輩のような友達ができました。

**K (女子)・・・**授業はやはり少数数で私の参加したクラスは、多いところで17人、少ないところは6人でした。先生と生徒の距離がとて近くて、分らないことはすぐに質問できる、そんな環境だと思いました。中休みというのがあるのですが、コモンルームで各自用意しているビスケットや紅茶、コーヒーを飲みながらおしゃべりをしていました。とても自由な雰囲気でした。この中休みでリラクセスして、その後の授業には集中することができました。

**I・・・**このプログラムを通して、僕は英語力の向上だけでなく、このままではいけないという自分に対する危機感も持ちました。もちろん、2週間やり通したことで小さな自信もつきましたが、いろいろな人との出会いで自分の世界が広がったように思います。これからの進路についても真剣に考えるようになりました。

**T・・・**私は高校からの入学で、引込み思案になっていたところを変えてみたいと思ひ応募しました。幸いにも留学ができるようになったのですが、本当に行つてよかったと思つています。自分のもつ能力を向上させていくこと、自分を見つめ直すことで新しい面を発見して開発させていくような、前向きな姿勢をこれからも持つていきたいと思つています。

**Y・・・**僕の感想は、歴史の授業で広島、長崎に原爆が落とされたことを学んでいることでした。原爆の問題は世界共通の問題だと実感できたことです。それと、日本と中国の区別がなく、よく中国人と間違われました。日本食と中国食の区別も分つていないのですが、ヨーロッパからみたら、はるかかなたのアジアの国の一つであるわけ、僕自身がイギリス人もフランス人も区別できないのと同じだと理解することができました。

**K・・・**遠い異国の地で2週間もやつていけるかなと不安でいっぱいだったのですが、ホストファミリーに支えられて楽しく過ごすことができました。優しい気遣いが

本当に嬉しく感じました。日本に行ったことのある人から、日本が好きと言ってもらえたとし、日本の文化のことを教えてあげたら喜んでもらったのも嬉しく感じました。

**O・・・**イギリスの生徒を見ていて、はじめがきちんとしていることに驚きました。小さいときから教会に行つて静かにする習慣がついていたり、親のしつけが厳しいのではじめをつけることができるようになってきているのだと思います。しかし、そのような規律の厳しい代わりに、自分の能力を伸ばす自由は確保されているようにも感じました。

**I・・・**この留学でたくさんのことを知り、学び、感じたことは、本当にかげがえない経験です。SOSSEPに関わつてくださった茗溪学園の先生方、イギリスの学校の先生方、優しく接してくれたホストファミリーの方々、友人となつてくれたみんなに心からお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。



クライスト・カレッジにて  
2月に茗溪学園に交換留学する3名の生徒と  
クライスト・カレッジに留学している日本人生徒と一緒に